FIKO NEWS FLASH

No. 13 February 1950

栄光学園中学校新聞部

横須賀市田浦町船越

入学試験

栄光は小学生の憧れの的である。今年もこの羨閥を目指して四百餘名の受験生がつめかけて来た。これらの受験生に対して二月二十一日から二十四日にかけて知能、体格、人物三つの方面から厳格な審査が行われた。記者は試験当日、或いは校庭に、或いは父兄の控室に、潜入して受験風景をキャッチしてきた。初日、予定時刻より一時間半も早い七時半にはすでに三々五々受験生及び父兄らしい人が校庭のあちらこちらにたむろしている。六年間のたゆまぬ努力の成果を、発揮するのはこの日だとの意気ごみが感じられる。しかし父兄はいずれも何とはなしに心配顔である。

九時十分前、校庭はもう受験生と父兄、その間をきびきびした体度で行き交う在校生でいっぱいである。やがて鐘が鳴ると受験生は父兄と分かれて五十人づつの組に分けられ朝礼台の前に整列し、点呼を受ける。遅刻した者は十二名である。

試験開始に先立って、ヘルヴェク先生から

「入学試験はもう始まりました君達の態度はもう見られています。もう君達は競争しているのです。明るい気持ちで元気よく自信をもってやって下さい。誰がうかるか分りません。そうゆう事は学校がきめるのではなく君達がきめるのです。……」

というお話があり、校長先生は大要次のようなお話しをなさいました。

「大きな希望と、大きな喜びを持って君達は来たのです。君達は皆よく勉強していたでしょう団体生活によって、良い社会人よい日本人になると思います。私達は君達の希望をよろこんでおります。学校の理想は固いものです。しかし試験については心配しないように。出来るだけ大勢の諸君が入るように祈っております。」

こうしていよ〳〵試験は開始された。父兄は気ずかわしげな顔で試験場に引率されて行く子供達を見送りながら、控室に案内されて行った。校庭はひっそりとしずまりかえり、やわらかな陽の光が平らなアスファルトの上に落ちているばかりだ。教室では受験生が難かしい顔をして考へこんだり、はっと思いあたったように頭をほころばせたり、或いはせっせと筆をはこばせたりしている中に時がたって行く。

控室にもぐりこんでみると様々な風景が見られる。校則の紙を開いて見たり、閉じて見たり窓の外の景色に見入ったり、おちつきのない山柄なお母さん。今にもこぼれ落ちそうになったパイプを依然とくわえて新聞に見入っている見山先生型のお父さん。種々雑多なタイプの父兄が思いくの姿勢をしているが、皆自分の子供の事を気ずかっているのだろう。そしらぬ顔をしてこの控室の会話を書きとめて見た。

「先生は問題は簡単なものだからどう深く考へなくてもいいのだと云うんですけれど家の子はどうも深く考へすぎて……」

「お尻の方がべたく落ちて眞中が入るんじゃないんでしょうかね。」 など勝手な推測を下す婦人、「いいですね、お宅じゃ一番ですもの」「いいえ、そちらこそ……」とほめっこをくりかへすお母さん、「始めは国語ですね」「國語ッ家のは國語が苦手で」といってカッカッカッと笑う年配のお父さん。中には在校生が必ずおじぎをするのを感心して、「この学校の教育が口氷だから、生徒も自然とれ儀が正しくなるんですな。」等と学校をほめている人もいた。

28日の校庭風景

筆記試験は第一日の午前だけで、第一日の午後と第二日、第三日は口頭試問、面接が行われた。口頭試問は一人の生徒を三人の先生があらゆる角度から見る。口頭試問では 色々珍答がでて試験官の先生方も、思わず微笑したそうである。

二十八日は合格者発表の日である。八時五十分頃幸福な氏名を書きつらねた紙を、大畑先生が広場に持って来て、つい立てに貼る。広場の窓には発表を見に来た父兄が心配そうな顔をのぞかせて次々に貼られて行く紙を見ている。定刻九時、鐘が鳴かれると、どっとなだれ込むようにして、入って来たお父さんお母さん生徒の視線は吸いよせられる様に、白紙の上にそそがれる。息きずまるような一瞬が過ぎると、そこここに「あった」「まあよかったわね」という喜びの叫びとも留め息ともつかぬ声が起る。まだ紙の上に視線をまよわせている人もいる。五分も立つと合格の喜こびのあまり校庭を飛びまわっている子があるかと思うと、目をふせてしょんぼりと引き上げて行く人もいる。何かこの数分間にすべてが終ったような気がする。やっと入試記事担当の記者も重荷がおりたような気がして、引き上げて来ると、友達同志で発表を見に来たらしいグループの中から、「この学校はおれの受けるような学校じゃなかったんだな」声高に云っているのが耳に入った。でも、多くの人々は、入学式をまつばかりだ。

ピクニック

三月十八日三年生は中学最後のピクニックに出かけた。省線衣笠より大楠山までのまともなコースを一人も知るものも無くただ感にまかせて歩いた。しかし幸いな事に、一時間後には頂上に到着した。シープでこられるはずの校長先生を待っていると、十一時ごろ、ガタガタシープにのって、思いがけなくもウルフ先生と一緒に到着された。

すぐ炊事にとりかゝった。附近から石を集めて、かまどを作り、学校から持参して来た大鍋でシャモと猪の煮つけをしようとしたがあまりかわいそうなので面倒を煮て、その代用とした。弁当のおかずは持参の必要なしとの事であったので、皆作りたてのおかずをいただいた。このあと、ココアの配給、炊事係は主に殿村先生とヘルヴェク先生とであり、両先生共に味見の大将だから配る時にはすでに半減していた事は確実である。それでも供等は満腹した。

食事の後、皆そろって歌を歌った。山本先生の子供時代にはやったカビのはえた様な歌の独唱や山猫のジェスチアスリの歌の合唱、又は本居先生の曲った頭からしぼり出した童話で、その主人公はシャモ、そして、この話しの話しっぷりによって、殿村先生は、三年間の自分の姿をトーキー映画で見るような気がした事であろう。しかる後、空は次第に曇って来たので午後二時大楠山の頂上で校歌の合唱を最後に楽しいピクニックを閉

じた。

雨にもめげず

30粁　3時間55分

左に海を、両脇に田畑を、あるいは、農家を見ながら久里浜――引橋――秋谷――逗子という昨年と同様（但し葉山の海岸通りを通らなかったもの）のコースに於て、今にも泣き出しそうな天気であった二月十四日、本校第二回の競歩会が行われた。

この競歩会の目的は健康増進、自然美の観賞そうして友愛ということにあり、これによって生徒の進歩、成長をはかるものである。それが故に、必ず二人以上で歩くこと、時と雨を必ずかくこと、昼事の時間として必ず十五分以上をとること、というような規則が作られた。

八時二十三分、校歌を合唱して、久里浜駅（省線）を出発。途中、ヘルヴェク先生始め、諸先生の激励の声にはげまされつつ、皆、ひたいから流れる汗をぬぐいつゝ歩いた。我こそは競歩会の優勝者となってみせんとばかりに、鉄脚をふるうもの、あるいはもうだめだとしずまりかえってしまうもの、さまざまな競歩会風景にコースはにぎわっていた。これでも秋谷から逗子のころになると、組と組とのへだたりや、一番とラストのへだたりも大分ひろがってきた。生徒は思い思いの場所に腰をおろして、食事を、雨を、詩をといかにも楽しそうであった。秋谷から葉山にかかるころになると雪が降って来たのであるが、生徒達はもうすぐなんだと、最後までも元気いっぱい、歩きつづけた。特に年の少い一年生の奮闘は実にみごとなものであった。しかし大部分の生徒は、大疲つかれていたようだった。こうして、競歩会も無事に終了したことと同時に、この競歩会によって、来る来年の競歩会が、なお今年以上に楽しいものとなろう。

今回の競歩会の優勝者は三年

〜十二時十七分着（十二時三十五分着（四時間十三分）、一年　（國）、……二年と同時間。

面白い現象として、孫　君が弟さんの16、君に追抜かれたり、午後からの天気にふさわしく一年の　君、　君が全校のラストだったりした。

狼先生

狼先生が御戸の六甲学園から来られたというのでさっそく訪問してみた。

御住居は将来の高等学校々舎二階の東南部の隅の部屋。そのドアには Wulf と記された名刺がはってある。

先生は、記者の方で舌をかむかどうかと心配する程物凄い早口で応対して下さった。

先生はドイツ、ライン河の近くのヴェストファーレム地方に生れ、ヘルヴェク先生と同じ学校を卒業された。ヘルヴェク先生が九年生の時にウルフ先生が一年生だったので大した交際はなかったがヘルヴェク先生とウルフ先生のお兄さんが同級だったのでヘルヴェク先生は、ウルフ先生の家へ遊びに行かれた事もあるという。先生が日本へ来たのはシュトルテ先生より遅く十二年前で、最近五年間六甲で生物と物理を受持たれた。本校でも生物と物理をお教えになる。

これで栄光動物園も充実して来た。しかしこの〝狼〟と云う名は〝山狼〟〝天狗〟のアダナとは類を異にする訳名であるからいっどこで呼んでも失礼ではないはずだ。名前をみたり言葉をきいたりしてもそっとするが理科教室の物理準備室には盗難防止を兼ねて、鋼鉄製の格子がはられ狼の檻となるから心配御無用。

洗礼

二月十九日　マチア藤村薫君長い病気の中に大いなる慰めとなった事でしょう。

三月十九日　マルチノ向井先生
オグスチノ柴先生
ヨゼフ青木仁市氏

先生の洗礼は本校で初めての事であります。

スペリング　コンテスト

二月四日（土）午後一時から久しぶりにスペリングコンテストが行われた。これは今までのやり方をかえて前々から選手をきめず、コンテストの直前に各組から級長が出て、帽子の中から組の人の名前が書いてある紙を五枚だけつかんで、校長先生に渡す。校長先生はそれを受け取ってヘルヴェク先生に渡し、ヘルヴェク先生がその紙に記された名前を読み上げるのであるその気抜な企画は皆を喜ばせたなにしろ、自分があたるかもしれないので、せんせんきようきよう。名前が読み上げられる度に、生徒は大変な歓声をあげ、これらの不幸なる犠牲者は、次から次へと変な顔をして壇に登る。その中級長自分から、自分の名前を引くという珍風景も出て又マタ大騒ぎ。一番最初は二年生で全員大爆笑。星語がはっきり分らなければ、いつまで立ってもスペルを云わないというような緩重な構えにもかかわらず落伍者は一人二人と席を去り、遂に2C　君と2C　君の接戦となったが、　君が一位となった。次いで一年生これもよく奮闘して　君が優勝、二位　君となった。三年になると皆疲をむいたり下をむいたりしていたが、やはり十名のものは運命にさからえず選出された。ところが三年生は、実にあっけなく一回目二回目あたりで選手席はすっかりさびしくなり、時間にして大分で勝負はつき、一位二位決定戦は弘　君がポカンとした顔をしている間に一位となり、二位は弘　君となった。

後から校長先生は、三年生はあまりあっけなかったと文句をいわれたので、その日は三年生にとって、あまりよい日ではなかった。七日（火）にはその六名に対し校長先生から賞品が贈られた。

良書案内

当真嗣康先生

飯島忠著　人間厚生　PHP出版社　二五〇

この著作は、ヨオロッパ的世界史を五つの視点から点描している。一、ギリシヤの学術　二、キリスト教の意義　三、ルネッサンスの意味　四、資本主義経済組織の成立　五、未来世界へのイデア、これである。南画家が毛筆のかるいひとなすりで竹の本質を描き出す如く、ヨオロッパ世界に於る人類の過歩をたくましくとらえている。専門家流のくたくたした叙述をぬきにして、人類のホップ！ステップ！ジャムプを、三段とびならぬ五段とびをあざやかにうきだしている。史学専門家でないからこそあめずおくせずこんなにものがいえる。それ故に諸君をして山にはいって山をみず、のうれいをなからしめる。これは又カトリックの視野からみた、正しく少年むきのヨオロッパ概観だ。教養書としてもおもしろくなごやかな心で読ませる魅力がある。経済学者で聞記者で、簡単家なる著者は、日本カトリック人にはめずらしいタイプだ。諧曲には通じ、俳諧や業語もてきわよくカトリック用語としてこなせるし、ユウモアあり、興智あり、芸術的感覚にもめぐまれている。カトリック内の達人冠かなと、わたしは時々にたりする。

カレイ

学期試験の最中、人見先生が一匹のカレイを発見し、八法先生が鉛でしとめた。きっと採点がカレイからだろう。まさか？